2012年度（第14回）学生懸賞論文「女性学インスティチュート賞」

総　評

米　田　眞　澄

本年度「女性学インスティチュート賞」に応募された論文は二本でした。選考委員の採点と委員会での議論の結果、最優秀賞は残念ながら該当論文なしと判断されましたが、二本とも優秀賞にふさわしいものであると評価されました。環境・バイオサイエンス学科の卒業生、森田涼香さん（B08891）の「若年女性における月経前症候群（PMS）の生体反応について」と、心理・行動科学学科の卒業生、前田めぐみさん（P08735）の「職場環境と個人特性がキャリア形成初期における理想のキャリア・パターンに及ぼす影響」という論文です。まず、選考委員の講評と選考委員会での議論を踏まえたうえで、森田さんと前田さんの論文の紹介と講評をします。

森田論文は、若年女性の月経前症候群と自律神経系の活動について明らかにしたものです。関係要因として、脳波、心拍変動、コルチゾール、アミラーゼを取り上げています。個人の問題とされがちである社会的認知の低い月経前症候群に対して生理学的な考察を行った論文であり、その着眼点もユニークだと高く評価されました。研究方法が綿密であり、単なるアンケート結果だけでなく、いろいろな科学的データを使って結果を分析することができていました。論文の形式も、論述の手続きや日本語の文体も含めて、よく整っています。

前田論文は、結婚・出産後も就労を継続する女性、結婚または出産を機に退職する女性、退職した後、子育て後に再就職する女性がいることを踏まえ、職場環境のみならず、個人の特性や価値観が、結婚・出産後の退職、就労継続に影響を及ぼしているのではないかという問題関心から、職場環境と個人の特性・価値観が、現代女性の結婚・出産を迎えた後のキャリア選択にどのような影響を及ぼすのかを、アンケート調査の結果から考察したものです。平易な文章で、項目別にポイントを抑えながら簡潔に理論展開ができている点、

Bandura の「自己効力感」をキーワードとして、その二つの水準を組み合わせながら論点を追うことができている点、現代の女性がおかれている社会状況から仮説３説を導き、６つの概念との重回帰分析により関係性を明らかにしている点が、高く評価されました。

いっぽう、いくつかの問題点も指摘されました。森田論文では、調査や解析の結果報告のレベルから新しい知見を取り出し、それを基にして、最初に設定された課題である「PMS リスク軽減のための具体的な指針」や「PMS の予防、回避策、早期の対処法」を打ち出すところまではいっていない点、実験２に関しては、サンプル数が少なすぎて、統計的な処理にそぐわず、そこから一般的な結論を導くのには無理があった点、女性の社会進出に伴う会社組織での PMS に対する状況などへの踏み込んだ考察が不十分だった点が指摘されました。

前田論文では、アンケート調査の手続きをきちんと踏襲するあまりに、そこから導きだされる結論が予測のつくものであり、世間の俗説と重なっている点、女性の社会進出の歴史および研究史について、より詳細な検討が必要であった点、対象の年代、既婚・未婚などの属性の問題から、377名中28名のみを解析したのは多少物足りない点が指摘されました。

しかしながら、森田論文も前田論文もジェンダーの視点を踏まえた考察がしっかりとできており、女性学インスティチュート賞にふさわしい論文となっています。これからも、多くの学生が「女性学」に関心をもって、懸賞論文にも積極的に応募してくれるような環境をつくっていきたいと思います。

（女性学インスティチュート学生懸賞論文選考委員長）